

発達障害児と問題解決学習と〔続き〕

清水俊皓氏のブログ（教育の窓・ある退職校長の想い）より

<http://blog.livedoor.jp/rve83253/archives/1219111.html>

⑨しかし、これはものすごく長い時間と根気の要る仕事だった。

先に、『授業中も、問題解決学習が定着するまでは、パニックを起こすことがあった。』と述べた。

そう。あったのだ。それは間違いない。

しかし、わたしが定着させたのではない。子どもたちが自主的に定着させたのだった。

そうしたなかで、教室を抜け出すこともなくなっていった。

今、思えば、わたしも、子どもたちも、発達障害に関しては無知だったけれど、『あんながいの外れなことはやっていなかったな。』という思いはある。

確かに、暗中模索、試行錯誤の期間が長すぎたという思いもある。

無知なるがゆえに、Aちゃんの成長にとってよくないこともしていたに違いない。その辺のことは申し訳なく思う。（…）

⑩Aちゃんの保護者は当初から理解があり、いつも感謝とお礼の言葉だった。他の保護者も、いつも温かな目で学級を見てくれた。これは、ほんとうに、ありがたいことだった。

卒業が近づいたころ、Aちゃんのお母さんがおっしゃった。

「ほんとうにクラスの皆さんのあたたかな雰囲気に入れ、うちの子は幸せでした。ありがとうございます。でも、中学校は心配です。他の小学校からも、何も知らない子たちが大勢入学してきますものね。大丈夫でしょうか。」

わたしは子どもたちの言葉を伝えた。

「中学校へ行って、Aちゃんがこまるようなことがあったら、ぼくたち、わたしたちが絶対守ってみせる。」

おかげで、中学校でパニックになるようなことは、ほとんどなかったようだった。

まさに、Aちゃんも、クラスのみんなも、『生きる力』を身につけたといえよう。

⑪今、試行錯誤の期間が長かったことは、申し訳ない思いがあります。

矛盾していますが、その一方では、問題解決型学級経営（こんな言葉はありません。でも、本記事では、使ってみたくになりました。）にとって、試行錯誤は必要不可欠という思いもあります。

しかし、無知でいいと言っているわけではありません。ぜったい、勉強は必要です。よく知っていれば、

それを子どもたちに話しても有効なことはたくさんあるでしょうし、

子どものすばらしい言動にもっと的確に対応することもできたでしょうし、

試行錯誤は必要不可欠にしても、その期間はもっと短縮することができたでしょう。また、わたしが無知だったがゆえに、無用のパニックを起こさせてしまっていたとも言えるでしょう。

⑫わたしは思います。

発達障害について、子どもたちは無知だったけれど、思いの根底には、『ぼくたち、わたしたちがとうていしないようなことを、友達のAちゃんは、なぜするのだろう』、そういう人間探求、友達探求の心があったのだと思います。

すると、『分かった。Aちゃんはこういうとき、パニックになるのだ。』という気づきが必ずやってきます。そして、『それなら、そういう行動をしないように気をつけよう』という気運が学級に醸成されるのです。

〔コメント欄〕

コメント1. Posted by アズ 2009年03月28日 19:02

A子ちゃんが羨ましいです、TOSHI先生のご指導法がもっと、広まってくれたらと、心から願います。

グレーゾーンの子を持つ母ですが、発達障害の知識を持って指導してくださる先生よりも、地域で長年「剣道」なり、「体操」なりを、愛情をもって指導されてきたの方が、全く予備知識がなくても、うまく導いてくださるし、何よりその場では差別をされない息子がいます。

試行錯誤があって、はじめてわかる事が多いはずですが。「発達障害の子は」とひとくくりに差別化してしまうことが、可能性も狭めてしまわないか？と心配しています。担任の先生は何か問題があると、では「養護学級の先生と相談して方法を聞いて」とおっしゃいます、いつも接している担任の先生の方がわかる事が多いと思うのですが、養護クラスにも在籍できず、普通級では別枠扱いで、親子とも苦しいです。

コメント2. Posted by toshi 2009年03月29日 02:31

アズさんは、『知識よりも心』とおっしゃっているのだと思います。わたしも基本的にはそれに賛成です。別な言い方をすれば、一人ひとりをしっかり見よう。そしてその子に合った対応、方策を考えようということだと思います。

まずはそれでしょうね。そして、それだけだと、誤解したり、間違っただけの対応をしてしまうこともあるので、やはり、知識を身につけて、よりの確な対応ができるようにしようということではないでしょうか。

《何よりその場では差別をされない息子がいます。》

なるほど。ほんとうにそうですね。これ、間違いなく言えることだと思います。

お説の通り、まず知識という考え方だと、グレーゾーンの子に対する対応がおかしくなることもあるでしょうね。

コメント3. Posted by アズ 2009年03月29日 12:08

グレーゾーンの子を持つ親として、上の記事にあるような授業を息子にも体験させてやりたいと思います。なおみさんが発達障害の子には合わないと言われたりする事が、どれだけの考えや経験を持って言われているのかわかりません。どうか「これは無理」「この子達は別枠」と差別される事なく、一人一人可能性も違うのだという心を持って、見ていただける事を願います。

コメント4. Posted by toshi 2009年03月29日 16:18

問題解決学習を、単なる指導法の問題、指導技術の問題、子どもが主体的に学ぶ授業形態というとらえでしかないので、適、不適という話になっていくのだと思います。『人としての生き方を養う。』『自己を確立していく。』という、『人そのもの』を養っているのだという部分を、まったく見てくださっていないようです。

また、『発達障害児と問題解決学習と、』シリーズのはんちゅうで言わせていただければ、障害のない子が障害のある子といっしょに学ぶことによって、共生の思想を身につけていくことができるという、その部分もまったくスルーされてしまっています。完全に分けて指導するわけにいかない以上、心を養う部分をスルーしたら、本シリーズ(4)に書かせていただいたように、『障害のない子には、わがままだということにしかる。障害のある子には、これは障害なのだからということに許す。』という、とんでもない指導がまかり通ることになります。